

# 名古屋グランパスの試合観戦において 南米出身の在留外国人が経験する阻害要因と個人属性との関連性について

○太田明李（中京大学スポーツ科学部 4 年）

川西司（中京大学スポーツ科学研究科）、伊藤央二（中京大学スポーツ科学部）

キーワード：「在留外国人」「阻害要因」「個人属性」「名古屋グランパス」

## 【1】目的

名古屋グランパス（以下、グランパス）のホームタウンである豊田市には多くの在留ブラジル人が居住し、豊田スタジアムの近くには 3,401 人の在留ブラジル人が居住する保見地区が存在する（豊田市, 2022）。この地域特色を活かし、グランパスはブラジル人 500 円観戦やブラジルグルメを提供する「Viva la Carnival～ブラジル祭り～」というイベントを開催するなど、在留ブラジル人サポーター獲得に向けたプロモーションを展開している。しかし、豊田スタジアムで在留ブラジル人を見かけることは少なく、彼ら彼女らが直面する試合観戦における阻害要因が存在することがうかがえる。先行研究では、J リーグ観戦者の阻害要因に性差があることが報告されている一方で（Yamashita & Harada, 2015）、オーストラリアへの中国系移民が新しい余暇・レジャー活動を始めるときに経験する阻害要因には性別や年齢は関連性がないことが報告されている（Tsai & Coleman, 1999）。そこで、本研究では南米出身の在留外国人の J リーグ試合観戦における阻害要因と個人属性の関連性について明らかにすることを目的とする。

## 【2】方法

2022 年 10 月にブラジル人向けスーパーマーケットとポートメッセなごやにて質問紙調査を行った。質問項目については、まず、個人属性として在留外国人に対する基礎調査報告書（法務省, 2020）を参考に、性別、年齢、サッカー歴、在留資格を尋ねた。試合観戦をする際の阻害要因に関しては、Tsai and Coleman (1999) を参考に 16 項目を援用した。回答には「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」の 5 段階尺度を用いた。

分析方法として、初めに阻害要因 16 項目に因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行った。なお、因子負荷量の基準値として 0.55 を用いた（Tabachnick & Fidell, 2007）。各要因を算出したのち、個人属性の 3 変数（性別、年齢、サッカー歴）を独立変数、各要因を従属変数にした重回帰分析を実施した。

## 【3】結果

78 名（スーパーマーケット 62 名、ポートメッセなごや 16 名）から有効回答を得ることができた。そのうち、在留ブラジル人が 76 名、ペルー人が 2 名であった。表 1 に示した通り、阻害要因 16 項目は 3 要因に分類され、「社会文化」、「観戦」、「仲間」と命名した。

表 1. 障害要因 16 項目の因子分析（主因子法・バリマックス回転）の結果

項 目	因子 1	因子 2	因子 3
<b>「社会文化」：平均値=1.98 標準偏差=0.86</b>			
言葉の壁を感じる	.679		
文化の違いによって嫌な思いをする	.658		
金銭的な余裕がない	.658		
周囲の観戦者との交流が難しい	.646		
スタジアム環境に対して嫌な思いをする	.609		
人種的な理由によって嫌な思いをする	.596		
受け入れられているという感覚がない	-.511		
周囲の観戦者とのコミュニケーションが難しい	-.508		
仕事や学校があるため時間がない	-.475		
<b>「観 戦」：平均値=2.03 標準偏差=1.04</b>			
豊田スタジアムでの観戦を楽しめそうにない		.787	
安心して観戦できない		.603	
豊田スタジアムでの観戦が魅力的ではない		.575	
豊田スタジアムでの観戦は重要ではない		-.475	
<b>「仲 間」：平均値=2.61 標準偏差=1.20</b>			
グランパスファミリーという意識がない			.630
一緒に行く人がいない			.615
家庭の事情があるため時間がない			-.514

重回帰分析の結果では、「観戦」( $F=2.78, p<.05, R^2=.08$ )に有意差が認められたが、「社会文化」( $F=0.77, p>.05$ )と「仲間」( $F=0.11, p>.05$ )に有意差は認められなかった。「観戦」障害要因に関して、男性は女性よりも高くなること( $\beta=0.31, t=2.26, p<.05$ )、サッカー歴が長いほど低くなること( $\beta=-0.29, t=-2.12, p<.05$ )が認められた。

#### 【4】考察

男性は女性よりも高い心理的障害要因を感じるため (Yamashita & Harada, 2015)、「観戦」に否定的であることが窺える。また、サッカー経験はサッカーへの関心を高めるため (Casper & Menefee, 2010)、「観戦」障害要因を低下させた可能性が考えられる。

#### 【5】結論

「観戦」障害要因を解消するために、サッカー経験者を中心とした在留外国人向けサッカー教室等をグランパスが開催し、彼ら彼女らの友人や家族も巻き込んでサッカーに触れる機会を提供することが有効であるかもしれない。そうすることで、在留外国人のサッカーコミュニティが広がり「仲間」障害要因も解消され、観戦行動に繋がると考えられる。